



楽器以上にデリケートな弓。
今号は、前回のトラブル楽器編に引き続き
弓に関するトラブルのあれこれです。

毛が切れた！

切れた本数が2～3本程度なら、問題はありません。切れた毛は邪魔にならないように、はさみなどで短く切っておきましょう。

ステージのバイオリニストが、曲のインターバルに、熱演で切れた弓の毛をむしり取っている姿を見ることがありますが、これはあまり



良いことではありません。毛を引き抜くときに、弓の内部で毛を束ねている部分が弛んで、他の毛も抜けてきてしまう可能性があります。

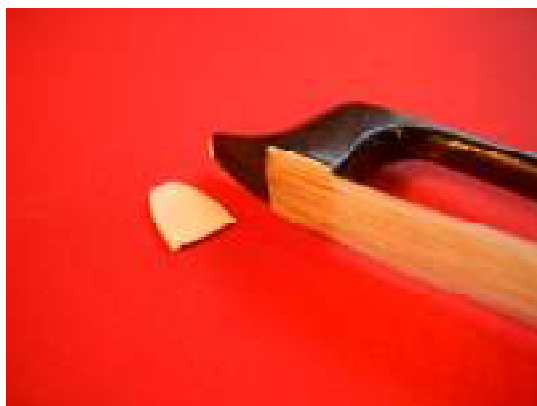
ケースに収めた弓の毛が繰り返し切れる場合は、虫の害が考えられます。

ケースにダニなどの毛を食べる虫が潜んでいて、弓の毛にやってくる場合が多いようです。時々ケースの掃除をされるようおすすめします。

チップが割れた！

弓先は、特にデリケートで傷つきやすい部分です。

チップとは、この弓先を保護するために取り付けら



れている部品。チップは弓先を何かにつけた拍子などに、割れることがあります。チップが割れることで弓先を守っているのですね。

チップが割れた状態のまま弓を使い続けるのは、ノーヘルでバイクに乗るのと同様に危険です。ちょっとしたことで大事故につながりかねません。

チップが破損したら、すぐに修理に出しましょう。チップの素材には象牙、牛骨、プラスチックなどが用いられます。

余談ですが、象牙はワシントン条約により輸入ができませんので、最近では代用品としてマンモスの牙が用いられます。近年、地球温暖化によりシベリアの永久凍土から、多くのマンモスが発掘されるようになり、入手が比較的容易になったのですね。

ねじを巻いても毛が張れない！



これは多くの場合、フロッグの雌ネジがすり減ってバカになったことによりです。

この場合、雌ねじを交換すれば済みますから、比較的

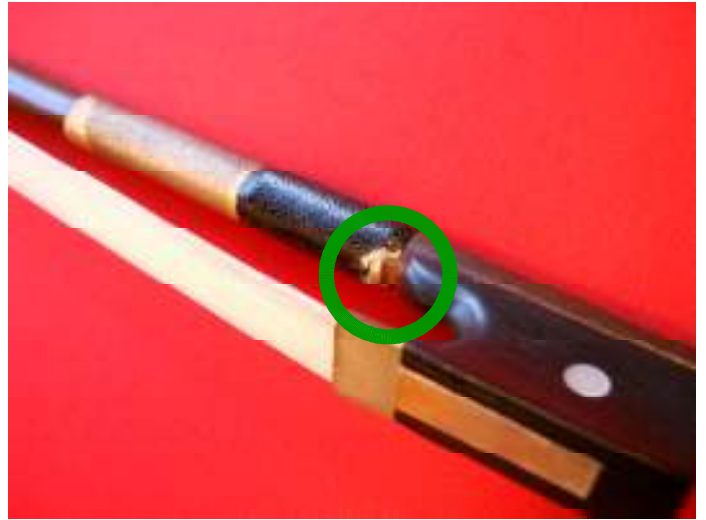
短時間で修理が可能です。しかし、フロッグが古く、状態が悪化していたり、特殊なネジを使っている場合などは、修理に時間を要することがあります。

また、長く使用しているうちに毛が伸びてしまったり、もはやネジをいっぱい巻いても、毛が張れなくなっていることもあります。このようなときは毛替えをするのが良いでしょう。

弓元の革がすり減ってしまいました！

革がすり減ったまま弓を使い続けている方は意外と多いようです。

もちろん、この革がすり減ったからといって、すぐに演奏に支障を来したり、弓に重大な障害を与えろると言う訳ではありません。



しかし、そのまま使用し続けることで、ゆっくりではありますが、確実にスティックを痛めていきます。

革は右手の親指が、直接スティックに当たるのを防いでいます。

ですから、この革がすり切れていると、親指との接触によりによりスティックが次第に摩耗してしまうのです。

革がすり切れたまま弓を使い続けたために、スティックの親指が当たる部分が掘れてしまった弓を時々見かけることがあります。

そうなる前に、革の交換をしましょう。

遊ぶ、マエストロ

クレモナ留学記～右往左往編～

男子禁制のはずの修道院の宿の中を、おいちゃんがひとりうろついている。オーバーオールに帽子、ちょうどノッポさんのような。朝から気にはなっていたけど、いまはとにかく**あの工房**がどこか、探したい。地図で通りの名前をひとつひとつ確認 Via Aselli, Via Giordano... でもなかなか見つからない。朝のお勤めを終えたシスターたちがちょうど玄関のところに集まって来たので相談してみると。。なんだあ、このチェントロ（街の中心）の地図に、彼の工房はないらしい。少し郊外にあるよ、と教えてもらったものの、クレモナについてまだ3日目、土地勘も車も、自転車さえないし。。

ああ、やっぱりそう簡単には会えないのかなあ、マエストロといわれる人たちには・・・とあきらめモードに入りかけたとき

「今から帰る方向だから、乗せてってやろうか！」
さっきのおいちゃん！？

でも乗せてってやると言われても、この人誰よ？

「行く？行かない？どうする？今一緒に行つとかなないと、明日はひとりじゃあ行けないよ！」

乗せていただきました。あこがれのマエストロに会うために、**ペンキ屋のトラック**の助手席に。

トラックはトウモロコシ畑の中を抜けてどんだん郊外に。

このペンキ屋のおいちゃん、聞かなくてもあれこれ話してくれる。人なつっこくて、おしゃべり好きな、典型的なイタリア人。

15分ほどして、着いたところは普通の（庭のバラが上品な）一軒家、看板もなく。表札に Pistoni っ
て書いてあるから、マエストロのそれにまあ間違いはなさそう。でもやっぱり電話でアポとか取ってないとまずいかなあ。インターホン押すのこわいなあ。今日はこのぞくだけにしておこうか。

「ピンポーン！！」

あ、おいちゃん！ **押した！**

2階の窓から顔を出したのは
マエストロのお父さんらしき人

「どちらさん？」

「えーと、えーと、初めて来ました。えーつと。。」
なんだっけ

「この人がマエストロに会いにわざわざ日本から来たんだ！」

っておいちゃんちょっと大げさな。確かにそれはひとつの目的だったけど、今回の目玉は製作学校の入学試験を受けることだし。

マエストロは外出中ということで、中で待たせてもらうことに。



レンガ色のタイルの床が美しい工房。正直、ここでバイオリンを作ってるなんて信じられない。作りかけのバイオリンはあるけれど、木くずがないし、工具もキチンと整頓されていて、作業台の上には何もない。そんなものたちをドキドキしながら見ている間も、おいちゃんたちふたりはしゃべる。しゃべり続ける。おしゃべりの国、イタリア。

10分後、前に車が着いて降りてきたのは、赤いパンツにサングラス、立派なおなかのおいちゃ・・え！**これがマエストロ！！**本で見た人はもっと、ほっそりタイプだった・・時が経ったというしるし。

「誰？」と言われる前に、おいちゃんたちふたりが説明してくれた。もちろん

「この人がわざわざ日本から会いに来た。」

と。そう、もうこのふたりは友達。といったふう。帰りのバスの乗り方を教えてくれて、ペンキ屋のおいちゃんは帰っていった。そしてマエストロのお父さんは黒と白の猫にえさをあげに。

こんな形でマエストロに会えたのが去年の夏。いまはペンキ屋さんにお世話になることなく（あたりまえ）自分で通えるようになりました。真っ青の中古自転車（お気に入り）で。

マエストロはいつもいろんな話をしてくれます。そのなかによく**正確な数字**が出てくるのはアバウトなイタリア人（ごめんなさい）では珍しいのかもしれない。1975年に卒業して、その時クラスにはイタリア人3人とフランス人2人と日本人1人と・・

それから15年間マエストロ・マルキ(現在製作学校の先生)と一緒に中心地の工房で仕事をして、いまの工房に移ってきて15年目。この写真は1989年の・・・といった具合。なるほど、美しく精巧な楽器が生まれるわけ(のうちのひとつ)です。

でも、いつもカチンカチンと仕事をしているわけではなくて、そう、遊ばないと・・・と言われたり。

え、マエストロ、何して遊ぶの？

「バイオリン作って。」

あ、そっか。え！

「ノミを入れるときもニス塗るときも、遊ばなきゃ。」

ガチガチに緊張したらその跡が残ってしまう。ノミは正しい位置でサクッと切るだけ。(あのお、マエストロ、それが難しいんですが・・・)もちろん刃物はよく切れなきゃダメ。ムリをすると木は泣いてしまう。友達を泣かせちゃいけない。

ニスはドアのペンキを塗るように軽く。

こんな具合で、学年末実技試験の前の日も

「**遊んでおいで。**」

と、言ってくれたマエストロでした。

Primo Pistoni(プリモ ピストーニ)

: 現代イタリアを代表するバイオリン製作家の一人。

以前、製作学校でも指導していたが、今は自身の製作に専念。

日々、より良い楽器を追求し続けている。

